

造船協會雜纂附錄 時報

第 2 號 昭和 21 年 8 月 刊 行

目 次

會報第 74 號掲載論文の梗概
7 月の諸會合
秋季講演會豫告
雜纂に對する會員諸君の希望事項の調査に就て
雜 錄
新入會者氏名
會員の消息照會に就て
會費納入に就きお願い

會報第 74 號掲載論文の梗概

造船協會々報は第 72 號迄は發行済み、第 73 號（昭和 18 年 11 月 刊 行）は印刷完成し發送間際に戰災に遭つたため今日迄發行出來ませんでした。最近再び印刷に着手したので速からず發送し得ることゝ思ひます。會報第 74 號に掲載せらるべき豫定の論文は昭和 19 年春工學會大會で發表の豫定で全部原稿を戴いた所、時局の關係で同大會が取止めとなつたため本協會關係の論文は紙上講演會の形式をとることゝし今日迄そのまゝ保存されてあつたものであります。然し乍ら目下の印刷界の狀況から推察しまして第 74 號の發行は少し遅れると思ひますのでこゝにこれ等論文の梗概を採録して置きたいと思ひます。尙序手乍ら、會報第 75 號には昭和 19 年秋季講演會で發表せられた論文を載せる筈でありまして、これも次の時報で梗概を御紹介致したいと思ひます。別和 20 年は講演會

は 1 回も開催せられず、従つて前號でお知らせ致しましたこの春の講演會で讀まれたものが、會報第 76 號に載せられる筈であります。

(1) 階段式可變断面を持つ梁及柱の一解法

正員 工學士 渡邊正紀君

一般に可變断面を有する梁及柱の問題は、或は各部均一強さを有する梁の問題として、或は塔狀構造物の自重安定の問題として、古くから多數の著者に依り論ぜられてゐるが、或特殊な場合を除きその嚴密解を得ることは困難とせられ圖式解法其他の種々の近似解法が行はれてゐる。著者は或函數 $f(x)$ が $(-1, 1)$ 域に於て有限にして且有限個の不連続點及極大極小を有するのみならば、その函數は所謂フーリエの級數に展開し得ることより先づ階段的に断面變化をなすものの断面積及慣性モーメントをフーリエの級數を以て表示しこれよりかゝる断面變化

を有する梁の撓み並に柱としての挫屈荷重の近似計算を試みた。

その結果實用上充分信頼し得べき結果が得られたので、かゝる方法を一般に任意の可變斷面を有するものに對して擴張を試みた。即ち任意の可變斷面を持つものの斷面積及慣性モーメントの變化曲線を n 等分せる各分點に於ける値を有する階段曲線を以て置換へを行ふことに依り、フーリエの級數を以て表示し得ることを明かにした。これより任意の可變斷面を持つ梁及柱の問題も同様に取扱ふことが出来る。

(2) 試作單純曲げ試験機

正員 工學士 原田正道君

船體縱強度を論ずる際に、甲板或は外板の挫屈、部材の有効斷面積、肋骨或は甲板梁の影響等を考慮するには、現在我々の有する知識は極めて不十分であつて、之が爲には縦横に防禦材を有する薄肉構造梁材の曲げによる實驗的研究を發展せしめる必要がある。而して斯る複雑な構造物の實驗を行はんとすれば、模型は可及的大型のものが要求せられ、試験機も亦大規模のものが必要となる。著者は單純曲げを行ふ大型試験機の考案研究に従事し、之が試作として最大曲げモーメント約 10 吨米の小型のものを作製し、その原理・作動状態及び大型試験機への發展性等に關する考察を行つた。

本試作試験機の特徴は、從來この種試験機を特に大型の試験に應用しようとする場合に必要なる次の諸條件を満足せしめた點に在る。

(I) 梁の兩端に加へる曲げモーメントを等しく保つための機構が確實で操作が簡單である。

(II) 曲げモーメントの測定が簡單且正確で梁端の傾斜角等の函數にならない。

(III) 曲げモーメントは零から順次滑らかに増大し、荷重に大なる飛躍が生じない。

(IV) 剪斷力・軸方向力等の外力を加へることなく、更に梁材の撓曲に伴ふ二次的軸方向力を生じない。

(V) 試験梁の寸度を自由に變へ得る。

(VI) 荷重用として餘りに大なる重量物を取

扱ふことがない。

(3) 木船の縱強度(初報)

正員 工學士 原田正道君

木船、特に所謂西洋型構造を持つた木船に於ては、巨大にして心距の狭い肋骨上に、幅狭い外板を多數張渡し、それ等の縦線は何らの接手も形成せられず、而もその横線は肋骨上に於て單なる衝接を行ひ、その端末を數本の釘で肋骨に固着してゐるに過ぎない。

斯くの如き構造を有する船體の縱強度を論ずるに當つては、曲げ應力はどの様に分布してゐるか、斷面係數は如何に考ふべきか、鋼船で喧しく言はれる縦線の剪斷應力、横線の接手の効率等は如何に處理されてゐるか、木船特有の斜帶板の作用は如何、木船の撓みが屢々非常な量に達する原因は何か等、從來顧みられなかつた問題が山積してゐる。

著者は之等の諸問題を逐一検討して行つたのであるが、本篇は其の第 1 報として第 1 章に於て木船の縱強度、第 2 章に於て木船の有効斷面係數を論じ、尙附録 1 として片持梯子梁理論、附録 2 として 1 箇の衝接を中心とする直交平面格子の引張理論が記載されてある。

(4) 軸條高低記録装置

正員 研野作一君
森 照茂君

著者等は船舶試験所第 2 試験水槽の軸條面の高低の經年變化を調査するため、從來の讀取法でなく連續記録の出来る自記装置を考案した。本器は從來の高低測定用の水準簿の水面を光の反射面に利用した光學的連續記録式であつて、これを取付ければ數分間で 200m の軸條高低を任意の長さのフィルム上に撮影記録することが出来る。尙本器の原理は目的に應じ他の種々の方面の測定器となるべき可能性がある。

(5) 伴流に對する淺水影響に就いて

正員 工學士 木下昌雄君
他 4 名 共著

淺水を航行する船體周圍の伴流を測定し、之

が水深と共に如何に変化するかを調べることは所謂浅水影響として知られてゐる抵抗の異常な増加現象の説明に役立つと同時に、併せて浅水航行用船舶の推進器設計上不可欠の伴流率の推定に有力な資料を提供するものと考へる。一方従來の研究を眺めて見ると、浅水現象にしても亦伴流にしても夫々獨立に多くの實驗が行はれてゐるにも拘らず、兩者を關聯させた「浅水時の伴流」或は「伴流に對する浅水影響」といふ事柄に就いての實驗的研究は未だ無い。著者等は此の問題を探り擧げて模型實驗を行ひ、其の結果を理論的に解析した。

實驗は假底に依らずに水深を實際に変化させて行ひ、第1實驗として船體中央横截面位置の船側に於ける伴流をピトー管で測定し、之を以て船體周圍の伴流を代表せしめ、第2實驗として推進器設計への資料を得る目的で推進器位置の伴流を翼車型流速計で測定した。

(6) 螺旋推進器の効率に對する 浅水影響の計算

正員 工學士 木下昌雄君

船舶の推進性能に對する諸要素中、浅水影響を被ると思はれる主なものとしては、船體抵抗は別として推進器効率・伴流率及び推力減少率等がある。

本論文に於ては推進器効率に對する浅水影響、換言すれば單獨試驗状態に於ける螺旋推進器を水深が有限な水中で作動せしめた場合の推進器効率と夫を水深が十分大きく且その没水深度が十分な状態で作動せしめた場合の推進器効率との比に就て理論的に研究した結果に就て述べてある。即ち水路が幅及び長さの方向には無限に擴つてゐる場合の所謂純粹の浅水中で作動する螺旋推進器の推力及び回轉力率に對する浅水影響を推進器の起す波に着目してそれに基づく造波抵抗及び波浪伴流を計算することに依つて理論的に求める方法を見出した。然して兩者の影響を併せ考へることに依つて推進器効率に對する浅水影響の問題を解いたのである。

(7) 全面的空洞現象を起した翼素 に對する側壁影響の計算 第一報(平面翼素の場合)

正員 工學士 木下昌雄君
准員 工學士 篠田仁吉君

本論文に於て著者等は二つの平行壁の丁度中間に置かれ且全匝的空洞現象を起した平面壁素に作用する揚力及び抗力の模様を明かにする目的を以て、先づ第1篇に於て完全流體の二次元不連続流の問題として解いた。その結果は、壁の距離が翼弦長に比して相當に大きくても側壁影響は可成り大きく効いて來る事、並に空洞現象を全く起さない場合即ち流れが連続流と見做し得る様な場合の同様の結果と較べて、側壁の影響が格段に著しく且その模様が全く相違してゐることが判つた。次に第2篇に於ては A. Betz の方法に依つて上記の不連続ポテンシャル流と考へた場合の結果に對する補正に就て考察を加へた。即ち空洞部分の壓力を實驗状態に於ける水温に對する水の飽和蒸氣壓に改める爲の補正及び翼素に作用する摩擦抵抗の爲の補正の二者に分けて考へ、夫々に對する補正量を與へる式を求め、簡単な種固函数を含む數値計算を行つて結果を圖示した。最後に、上述の補正を行つた揚力係數及び抗力係數が、見掛けの空洞指數及び l/D (l は平面翼素の長さ、 D は平行壁間の距離) の變化と共に如何に変化するかを迎角 $\alpha=5^\circ$ の場合に就て計算してその結果を圖示した。その結果は、第1篇で求めた完全流體の二次元不連続流として解いた結果とは模様か全く異り、全面的空洞發生状態に於ては側壁影響は恒に1以下であつて、 l/D の値の増大と共に揚力及び抗力は共に減少してゐる。

(8) フォイト・シュナイダー推進 器の近似解法

正員 工學士 谷口 中君

フォイト・シュナイダー推進器を理論的に精確に解く事は螺旋推進器に比して極めて困難で、實用の見地からは實驗的研究に依る外はないと考へられる。本論文は實驗的研究に對する

豫備として、又フォイト・シュナイダー推進器の初期計畫に於て、其の大體の寸法の選定乃至は設計に資する事を目的として適當な假定の下に近似的にフォイト・シュナイダー推進器を解いたものである。

フォイト・シュナイダー推進器の推進器位置に於ける誘導速度は場所に対しては勿論時間に対しても變化して極めて複雑であるけれども、平均を考へて、推進器流断面上に或適當な大きさの一樣な進行方向の誘導速度があるものと假定した。翼に対しては橢圓形の翼荷重分布を假定した。更に非定常運動に於ける翼性能は通常の風洞試験結果に依る定常状態に対するものとは相違する筈であるけれども、翼數が相當に多い時は各翼に於ける非定常性が互に相殺されて推進器全體の作用を考へる時には定常的に取扱つて良いと考へられることゝ、少くも揚力に關しては定常的に考へて近似的に差支へない事が實驗的にも示されてゐるので定常状態に対する性能をその儘使用した。

本解法の1例として普通の割合の翼寸法につき數値計算を行つて特性曲線を求めた處、螺旋推進器の場合に對すると全く同様に推進器の選定及び翼の寸法を定めることが出来ることが判つた。

(9) 構造用特殊壓延鋼材の腐蝕 試験成績(2)

正員 工學士 湊 一 磨君
他 3 名 共 著

著者等は第1報に於て構造用特殊鋼壓延鋼材として試作したマンガン鋼に就て述べた。今回は特殊元素として珪素を撰んだ珪素鋼壓延鋼材に就て腐蝕試験を行つた結果を記載してある。

今回試作した壓延鋼材は強度はデュコール鋼と軟鋼との中間にあり、普通鋼に比して清水に就ては耐蝕性殆ど同様、海水及び人工海水に對して耐蝕性は同等或はそれ以上に良好であり、更に珪素含有量を増す時はこの性質は更に改善されるものと考へられる。

機械的性質、工作性の方面から見て本鋼材は強度は充分で切欠感度も小さいが、一方冷間屈

曲或は熔接部の韌性等に多少缺點がある。この點を改善する爲に、珪素及び滿庵を添加した珪素滿庵鋼材を試作し研究を行ふことになつてゐる。

(10) 海水中に於ける軟鋼の電解腐蝕 と推進器の電氣的防蝕法

正員 工學博士 奥田 克己君
他 2 名 共 著

海水中に浸漬せる金屬の表面がら海水に向つて電流が流れれば多くの場合金屬の損耗を伴ふことは周知の事であるが、著者等は軟鋼に就て電流と損耗量との關係を實驗的に確めた結果次の様な結論に達した。

(I) 海水中に於ける軟鋼の腐蝕は實用上全く電氣的現象として取扱ふことが出来る。

(II) 腐蝕を防止するには被防蝕物を陰極として電流を通ずることにより金屬の海水に對する電位を下げればよろしい。

(III) 上の如くして金屬の海水に對する電位を下げ得るのは全く分極作用に依るものであるから、電氣的防蝕法を最も合理的に實施するためには金屬の分極特性に就て知る必要がある。

(IV) 電流密度の分布は品物の形狀のみならず大きさにも關係するから、模型實驗を行ふ場合には相似法則に留意しなければならない。

(V) 品物の形狀・寸法等に依り電流密度が如何に影響されるかに就き大體の概念を把握するためには解析的方法を用ふことが極めて有益である。

(11) 水管罐についての研究

協同員 石田千代治君

水管罐の各部について、從來の文献中其の結果が一致せざる點及び未だ決定的成果が得られなかつたものに就き研究を進め、主として蒸發管に就き次の諸項目に分けて發表してある。

(I) 蒸發管用繼目無鋼管の蒸性質

(II) 蒸發管用繼目無鋼管と水道水との熱傳導及び蒸發管内の循環並に沸溢

(III) タクマ水管罐についての實驗

(IV) 蒸發管の最大應力及び水管罐の限界負

荷

(12) 衝撃を受ける梁に就て

正員 工学博士 渡邊 恵 弘 君
 准員 工 學 士 栖 原 二 郎 君

従来梁其の他構造物の強度は静力學學に取扱はれて來てゐるが實際の荷重状態は時間と共に變り、従つてこの爲其等の構造物内の應力、撓み等は時間の函數となる。特に近時間問題となつてゐる衝撃に依る強度の問題は静力學的に解決することは絶対に不可能で、時間を入れて取扱はなければならぬ。

著者等は2種の衝撃荷重を受ける有限長及び無限長の梁及び圓環の撓み及び曲げモーメントの時間的變化を調べ、その最大値を簡単な式及び圖表で表はした。又有限長の梁に於て徑間長の變化が最大撓みに及ぼす影響を調べ最大撓みを與へて、徑間長を求める方法を示した。

7月の諸會合

18日(木) 座談會「船の電氣熔接」

午後2時から船舶工學科會議室で本協會として初めての座談會が開かれた。出席者は主催者を代表して山縣主事、招待した方々は榊原敏止、福田啓二、古武彌輔、吉武嘉一、吉識雅夫、木原博、今井信男、御鳴要の諸君であつた。先づ山縣主事から挨拶があり、榊原君の司會で話は進められた。内容は群細雜誌第268號に掲載される筈であるが、大體アメリカのリバタイ型の熔接狀況に鑑みて、日本の船も漸次全熔接になると思ふが、それには將來如何なる方面に力を注ぐべきかといふのが話題の中心となつた。結局、熔接構造とするやうに設計することが第一、次は電氣熔接をするやうに現場の機械器具を整備し、板の熔接に對する準備加工をよくやり、大型のブロックを陸上で機械熔接し得るやうにし、これに對する検査をX線を應用して實施するやうにすること、優秀な心線を鋼板に附屬して義務出產させることなどに着いたやうだつた。尙 Joint efficiency をいくらに取つたらよいかの基準を適當なところで決めて貰ひたいといふ希望も出た。話は次から次へ移

り、非常な成功裡に5時半散會した。

24日(水) 臨時評議員會、定例理事會
 午後2時から船舶工學科會議室で臨時評議員會、續いて定例理事會が開かれた。出席者は井口會長、山縣主事、加藤、吉識、常松各理事、福田、朝永各監事、赤崎、出淵、菅、榊原、瀧山、渡邊(賢)各評議員、議題とその結末は大體次の通りで、散會したのは午後7時であつた。因みに議事(3)以下は定例理事會の議題であつたが、評議員の同意を得て一括臨時評議員會で處理することとなつた。

議事(1)帝國學士院、學術研究會談、日本學術振興會の改組に伴ふ帝國學士院任期會員選出に關する件

今般學術研究會談の提唱に基いて、目下帝國學士院、學術研究會談、日本學術振興會の改組が審議中であるが、その案の内容に就き會長から説明があり、續いて同案中の帝國學士院任期會員を本協會から數名選出するに就てその選出方法につき協議した結果、或數の候補者を評議員で選定し、これを參考として正員に示し、正員の選舉により決定することに申合せた。

議事(2)戰時中行はれた研究考案等で未發表のものを集録する爲の準備委員會設置の件

戰時中行はれた研究考案等で、機密其の他の理由で未だ發表されてゐないものは完成未完成を問はずこの際集録しし残して置くことが必要であるがこれを如何なる方法で實施するかにつき協議した結果、今秋の講演會の論文募集の際これ等のものをも出来るだけ發表せらるゝやうに勧誘する一方、別に本協會内にこれが實施方法を考究するための準備委員會を設けることとし、その構成を理事に一任することに申合せた

議事(3)入退會者承認の件

入會申込者5名、退會申出者3名の入退會を承認した。入會者氏名は別項に記載した。

議事(4)第49期年度通常總會及秋期講演會開催に關する件

11月10日(第2日曜日)東京帝國大學第一工學部船舶工學科會議室で開催することに決め

られた。

議事 (5) 講演論文授賞に関する件
會報第 73 號及び第 74 號に掲載の講演論文
中から授賞候補論文を選定し併せてこれが審査
員を委託された。

議事 (6) 研究委員會新設の件
技術委員會が解散せられたので豫ての懸案に
従つて研究委員會を新設することとし、差當り
設置すべき研究委員會の名稱(假稱)及びその委
員銜格擔當者を次の如く定められた。尙これ等
研究委員會の構成案は 9 月の定期評議員會で審
議することに申合せた。

電氣熔接使用に関する研究委員會

福田監事
吉識理事

木船に関する研究委員會

山縣理事

漁船に関する研究委員會

山縣理事

鋼船工作法に関する研究委員會

吉識理事

議事 (7) 便覽の一部を單行本として出版する
件

船舶工學便覽の一部には少しく説明を敷衍す
れば立派な冊子が出るものもあるから、これ
を出版してはどうかとの意見があつた。便覽幹
事會でその具體策を研究して貰ふことに申合せ
た。

議事 (8) 試験水槽委員會委員更迭の件

6 月 24 日開催の試験水槽委員會第 25 回會
合に於て水槽の第 1 線から退いた 10 委員の解
雇及び新たに 8 委員の委屬を決定したのでこれ
を承認した。尙試験水槽委員會の性格を變へた
上で今回解雇の委員中若干名を客員又は委員と
して迎えるのが適當と思はれるので、加藤理事
からこの旨評議員會に申入れることに決議され
た。解雇並に新たに委屬すべき委員氏名は次の
通りである。

解雇 八代 準君 佐藤 兎君 山縣昌夫君
赤崎 繁君 研野作一君 近藤忠夫君
佐藤正彦君 大津義徳君 村中 穂君
出淵 巽君
委屬 土田 陽君 谷口 中君 栗田 晋君
井上正祐君 原田正道君 吉岡 勳君

乾 崇夫君 他に阪大より 1 名

報告 (1) 第 49 期年度臨時總會經過報告の
件

6 月 29 日開催の臨時總會は出席者 7 名、委
任狀出席者 178 名、全會一致を以て議案全部原
案通り可決承認せられた旨報告があつた。尙所
定の期限を過ぎて到達した委任狀は 58 通であ
る。

報告 (2) 時報發刊の件

雜誌が定期的に刊行せられるに至るまで會員
との連絡を緊密にするため雜誌附録として同誌
8 頁程度の時報を發行し、事務事業の状況を速
報することとし、第 1 號は目下印刷中で 8 月中
旬には刊行を見る豫定である旨報告があつた。

秋季講演會豫告

11 月 10 日(第 2 日曜日)東京帝國大學第一
工學部船舶工學科講義室で、第 49 期年度通常
總會に引續き講演會を開催することに決しまし
た。この際會員諸君の御研究の結果をどしどし
御發表下さるやう御願ひします。特に戦時中研
究せられた事項で機密扱その他の理由により今
日尙未發表の儘のものは此の機會に公表せられ
んことを希望します。

追て、論文の應募要領は次の通りであります

1. 講演申込は来る 9 月 15 日迄に願ひます。
其の際講演題目及び講演所要時間その他の
希望事項を御通知下さい。
2. 講演申込者は来る 9 月 30 日迄に英文の講
演要旨を附記した原稿及び前刷用として、
10 行 25 字詰原稿用紙 2 枚程度の梗概(上
記英文の講演要旨を以て代へても差支へあ
りません)を提出して下さい。
3. 印刷用紙が極度に制限されておりますから
論文は出来るだけ簡単に記載して下さい。
4. 目下の印刷能力の関係上、數式は別に印刷
したいと思ひますから成る可く附録として
末尾に添附して下さい。尙そのまま寫眞に
撮れるやうに附圖と同様の書方をして戴け
れば一層結構です。
5. 附圖、附表は寫眞で縮小しますから文字や
線を成る可く太く書いて下さい。

6. 原稿用紙御入用の向は講演申込の際その旨御申出で下さい。

雑纂に対する會員君の希望 事項の調査に就て

先般編輯連絡員を通じて雑纂の内容に対する會員諸君の希望、意見等を徴しました所、今日迄に連絡員7名の方から會員約100名の分を集めて御送り戴きました。編輯係ではこれを貴重な参考として、成る可く會員諸君の御希望に添ふやう内容を改善して行きたいと考えております。どんな御希望があつたかを次に掲げることと致します。尙下記以外に御希望なり御氣付きの點がありましたら何卒御通知下さるやう御願ひします。

1. 記事の種類に対する希望

戦時中諸外國に於ける造船造機關係の狀況を載せて貰ひたい。(19票)

理論的よりも實際的のものを多くせよ。設計、構築、故障、修理その他現場の記事を望む。(8票)

國內の造船造機海運各界の動向を知りたい。(5票)

船の電氣熔接に關する記事を望む。(5票)

戦時中海軍その他で行つた機密研究を公表せよ。(5票)

小型船の船體及び機關に關する記事を望む。(5票)

新造船要目表を記載せよ。(3票)

各自の持つてゐるデータを公開せよ。(2票)

造船以外の關係工業の記事を望む。(1票)

航空關係の外國文獻を紹介せよ。(1票)

運航者側から見た船體及び構築に對する要求又け經驗談等。(1票)

商船會社保有船の名簿要目等を記載せよ。(1票)

船用機關の記事を多くせよ。(1票)

2. 雑纂に質疑應答欄を設けることの可否

賛成 45票、不賛成 1票

賛成 45票の中には或造船所職務の會員全體の意見を取纏めて連絡員から賛成の通知のあつたのが二三ありますから、會員數から申せば今回回答のありました會員の殆ど全部が賛成といふこととなります。但しこの欄を設けるに就て次の希望的條件を附せられた方があります。

(イ) 回答を専門家に依頼すること、又は質問者が回答者を選定し得るやうにすること。

(ロ) 回答は雑纂紙上のみでは遅れるから質問者には早く通知すること。

(ハ) 必ずしも雑纂に掲載する要なし。

3. その他の希望事項

協會が主體となり、學者技術者が一團となつて新活動を開始されんことを希望する。協會が中心となり、國內造船所の技術交流を希望する。

造船術語の無理な邦語を廢せよ。例へば Beam knee を梁肘とするが如き。

優良圖書の紹介欄を設けよ。

座談會を各地域毎に開催せよ。

講演會を會員の分布數とみらみ合せて地方でも開催せよ。

會報と雑纂とを合併せよ。

會報雑纂の發行期日を嚴守せよ。

尚報を發刊せよ。

便覽、會員名簿の發行を急がれたし。

會員移動欄を設けられたし。

雜 錄

新入會者氏名

昨年3月10日事務所が戰災の爲焼失しました後、本年8月3日迄に入會を申込まれた方は正員4名、准員9名、學生員99名、合計112名でありまして、その氏名は次の通りであります。

正 員

酒井彦四郎君 長谷川加三君 林 毅君
藤井 宏君 (4名)

准 員

内田 秀雄君 大原 榮一君 加瀬喜八郎君

工藤 長造君 黒田 壽紀君 古坂 重一君
 西川 義雄君 松野 格一君 村上 哲一君
 (9名)

學生員

阿部 晃君 會澤 謙君 秋村 嘉穂君
 井坂 豊二君 井上 榮三君 伊東 弘造君
 伊東 久君 伊藤 伸夫君 飯坂 寛君
 石塚 且君 泉 益生君 岩佐 亨君
 宇治田廣郎君 宇野澤道之助君 植竹信次郎君
 植野精之助君 江見 堀藏君 大喜多敏明君
 大津山俊夫君 岡田 統夫君 岡本 富保君
 龜山 進君 萱原 博美君 川勝 康郎君
 川口 義男君 川崎 弘君 川村 皓章君
 河原 義治君 岸 康太郎君 楠田 忠雄君
 桑山 昭夫君 小林 多聞君 後藤 大三君
 佐藤 健三君 坂尾 総君 坂川準之助君
 阪口 資三君 坂口 久雄君 篠村 義夫君
 澤山 耕作君 志賀 幹君 慈幸 嘉一君
 柴田 實君 島 榮吉君 嶋田 晴夫君
 新堀 千尋君 瀬戸 武治君 田崎 亮君
 田中 幸敏君 田淵 隆之君 高井 良明君
 竹内 浩三君 竹本 賢一君 谷口 房三君
 爲廣 正起君 千種 茂雄君 土屋 孟君
 辻田 幸治君 寺内 安久君 外山 嵩君
 中尾 大君 中野 幹雄君 長澤 準君
 南波 正昭君 西川 輝樹君 西村 智君
 貫名 敏彰君 能登 隆一君 能美耕一郎君
 馬場 四朗君 橘川 勝君 服部 幸英君
 濱田 芳秀君 渡村統一郎君 早船 信夫君
 春田 豊君 東成 光君 藤井 良一君
 星野 守君 堀之北克朗君 松本 敏夫君
 松本 政幸君 宮本 正二君 村元 伸夫君
 森川 清男君 八幡 利一君 矢野 剛君
 安田 成勲君 山口 勇男君 山下 英一君
 山田 一善君 山田 祥克君 梁瀬 明君
 與實田千秋君 吉川 廣人君 吉田 弘孝君
 吉野 啓三君 吉村 繁君 立半 治君
 (99名)

會員の消息照會に就て

會報や雜誌が規則正しく發行出來なくなつて
 から以來會員の住所や勤務先が不明のため協會

でも完全な名簿が作製出來なくて困つておりま
 すが、會員諸君に於かれても不便を感じておら
 れることゝ推察します。それでこの時報を利用
 して「尋ね人」式に、消息を知りたいと思はれ
 る方の氏名を協會へ申出られてこれを時報に載
 せ、その方の消息を知つてみられる方から御通
 知を頂いて尋ねられた方に御返事するやうにし
 て見たいと思ひます。どうか御利用下さい。

會費納入に就きお願い

本協會では御承知の如く毎年1月と7月とに
 半年分づゝ會費を徴集しておりますが、前號で
 御覽になりましたやうに本年下半期から會費が
 次のやうに改められましたので、今度御請求申
 上げる分からはこの新會費をお納め願ふことにな
 ります。申し上ぐるまでもなく、會員諸君から
 戴く會費は本協會活動の源泉でありますので
 何卒漏れなく成るべく早く御納入下さいませ
 う御願ひ申し上げます。尙會費納入のため振替
 用紙を同封致しましたから御利用下さい。

新會費(年額)

團 體	1 級	3000 圓
"	2 級	2000 圓
"	3 級	1000 圓
"	4 級	300 圓
正 員		60 圓
准 員		40 圓
學 生		24 圓

昭和 21 年 9 月 20 日 印刷

昭和 21 年 9 月 25 日 發行

東京都世田谷區代田 2 丁目 784

編輯兼 出 淵 巽

發行 者 出 淵 巽

東京都瀧野川區上中里町 153

印刷 者 倉 澤 直 男

東京都瀧野川區上中里町 153

印刷 所 會社 双 文 社

東京帝國大學第一工學部

船船工學科内

發行 所 社 團 造 船 協 會
 法人